

新聞雜誌

明治辛未十月

定價二匁

第其號



特	別
18	
787	
16	



緒言

凡天下の物事日ニ新ナルニ我未タ見聞セサルヲ知テ吾知識ヲ廣ムルヨリ
 樂シキハナシ見聞ノ狭キ田舎人ハ心頑ニ知暗シテ疑惟ムク多ク竟ニ我ヲ
 是レ人ヲ非トスルノ過アリ今日カハル辱キ 御代ニ逢ヒテモ遠境ノ人ハ
 太政ノサマヲモ知ラデ却テ疑非ル者モアルベシカクテハ違カタク世ニ生シカ
 ナシ今 官許ヲ受テ新聞松局ヲ開キ 大政ヲ始メ諸府藩縣ノ變革
 又ハ里巷ノ瑣事外國ノ異聞マテ見聞ニ随ヒ刊行スルハ我 日本國中
 ノ人々ト新知ヲ開ク樂ノ同シ頑ナル心僻ノル事ヲ棄ントテナリ願ハ此時
 ヲ読玉フ人々ヲ聞テニテ推シ近ヲ知テ遠ヲ察シ天地間ニ我意外ノ驚可
 喜可キ事多ク唯一隅月ノ見ルハ田舎人タルヲ免レス夏未氷ヲ殺ノ笑有
 知モハサテソ復古ノ 大御代ニ生レシ人タルニ負カシト云ベク



新聞雜誌第十六號 明治四年辛卯

○神奈川縣知事陸奥氏ノ事ハ外國人頗ル賞賛セル所
 ニテ彼ノ新聞紙ニ載ルコト屢トリ想ニ應接公正處置
 明決ニシテ能ク内外ノ事體ニ通シ舊弊ヲ改正スル
 多シト見ユ畢竟外人交接ノ地ニシテ開化ノ進歩舊知
 事ニ超ルコト多キヲ以テ此擯賛ヲ得タルナラン
 ○九月廿二日東京靈岸嶋田漕社近邊ニテ弘明丸 横濱
 ノ河蒸出帆ノ砌碇ヲ揚ル機會ニ客二人水夫一人碇綱
 氣船 引レ水中ニ没セシガ客二人ハ辛ラフシテ命ヲ得水夫

新聞雜誌第十六號

ハ遂ニ弱死セシト云

外國新聞支那貨幣ノ事ヲ論ゼシ條ヲ畧抄ス

貨幣ハ開化必用ノ者ナルニ支那ニ於テ善貨ニ乏シキ
 ハ缺典ト謂フベシ其銅錢ハ價微少ニシテ毫釐ニ過キ
 ズ銀貨ハ巨大ノ銀塊ニシテ提携ニ便ナラズ然レモ支
 那人ハ微賤ノ銅錢數千ヲ携ヘ或ハ重大ノ銀塊ヲ持テ
 テ其不便ヲ覺ラズ而メ外國人ハ其銅錢ノ價賤クシテ
 少物ヲ買フニモ足ラス銀貨ノ提携ニ便ナラザルヲ以
 テ兩ナガラ之ヲ煖ヒテ用ヒズ販鬻ノ度毎ニ外國ノ貨
 幣ニ換テ計筭ス其繁雜知ルミシ支那人動モスレバ其

近國ヲ指シテ夷狄ト賤メドモ此一事ニ於テハ近國反
 テ支那ニ勝レリ日本暹羅印度緬甸交趾等ノ諸國皆
 各其國ノ貨幣アリ支那モ古昔ハ便利ノ貨幣有テシ
 未詳ノ代ニハ金銀銅ノ貨幣アリ又シヤン詳ノ代ニハ
 四テールス六テールス八テールスノ貨幣アリ銀ト錫
 トニテ混鑄セリ又漢ノ代ニ粘土ニ印シテ膠ヲ塗レル
 貨幣アリ又シンノ代ニハ雁眼ト云極小ノ銅錢アリ水
 ニ投スルニ能ク浮ブト云其薄キ一亦知ヘシ此錢一萬
 ヲ得ザレバ一日ノ糧ヲ買ヒ難シト此頃ノ銅錢ハ此ノ
 如ク甚シカラズト雖氏猶大ニ勝タル者ニ非ズト云々

○東京下谷邊ニ住メル某家ニ厄今ノ士アリ主ノ妻ト
 通シ終ニ相謀リ主ヲ害シ偽テ賊ノ為ニ殺サルト訴ヘ
 シガ主ノ女十四歳ニテ初メハ母ノ威ニ畏レ實ヲ知テ
 秘シ居ケレド父ノ非命ニ終リシノ悲シサト母ノ不義
 ニ恚ナルノ悔シサニ忍ビ得ズ遂ニ之ヲ言出テ發覺セ
 シメシトソ

山口縣舊知事毛利元徳管内士族中へ告諭書寫
 我家祖先諸公疇昔 天朝へ忠勤ノ餘勲ヲ以テ辱クモ
 累代防長二州ノ地ヲ領シ一萬有餘ノ士ヲ養育シ寒而
 衣饑而食スルヲ得ルモノハ偏ニ 天恩ノ優渥ニ因ル

ナリ汝等祖先亦皆其恩賚ニ與レリ雖然尸位素餐舊染
 ノ風習ニ安シ恩ヲ受テ無所酬モノ豈人臣ノ屑トスル
 所ナランヤ先考忠正公ニ至リ大ニ此ニ感スル所アリ
 抑數百年來政權下ニ移リ 皇運日ニ衰替シ人民 朝
 廷ノ尊キヲ知ラサルヲ憂ヘ奮然天下ニ先子義ヲ邊隅
 ニ唱ヘ艱難ヲ凌キ不逞ヲ拂ヒ再ビ 天日ノ光輝ヲ拜
 スルニ至ル 朝廷屢其偉勲ヲ賞セリ是皆汝等ノ親ク
 知ル所ナリ予不肖ト雖モ亦親ク公ノ教誨ヲ奉シ日夜
 勉勵其功績ヲ墮サンコトヲ恐ル曩者 朝政維新ノ日ニ
 當リ宜ク大ニ施設スル所アル可シ然ルニ中古群雄割

據ノ勢ニ因リ諸藩各其土地人民ヲ私有シ 朝廷ハ徒
 ラニ空器ヲ擁シ政令其實ヲ舉ル能ハズ是ニ於テ己巳
 ノ歲四藩合議シ版籍ヲ奉還シ政令一ニ歸センコトヲ願
 フ 朝廷之ヲ採用シ我ヲ待ニ不才ヲ以テセズシテ更
 ニ知事ノ職ヲ命セラル爾來勵精聊藩政ヲ釐正スト雖
 モ未タ其治績ヲ奏セス因テ惟フニ予ノ汝等ニ於ル吾
 臣ノ名義ハ既ニ藩籍奉還ノ時ニ盡ルト雖モ依然トシ
 テ舊領地ヲ管スルヲ以テ猶或ハ君臣ノ餘習ヲ存シ隨
 テ藩政モ亦私情ニ流レ措置其宜キヲ得ルコト能ハズ此
 等因襲ノ弊今ニ於テ一洗セズンバ何ヲ以テ 政令一

ニ歸シ人民 朝廷ノ尊キヲ知シ故ニ比來又予カ官ヲ
 解ンコトヲ願フ數日ナラスシテ廢藩為縣ノ令下ル且本
 官ヲ免シ縣廳事務ノ如キハ暫ク參事ニ任ス於是予カ
 素志始テ貫徹スルヲ得感激ノ至ニ堪ヘサルナリ予ハ
 今ヨリ 闕下ニ住シ親シク 聖旨ヲ奉承シ日夜奮勵
 智識ヲ磨キ陋習ヲ洗除セントス此ノ時ニ當リ汝等若
 シ舊情ニ拘泥シ疑惑ヲ生スルコトアラバ其責予ノ不職
 ニ歸シ 朝廷ニ對シ奉リ深ク恐悚身ヲ措クニ地ナシ
 願クハ汝等能ク祖先諸公及ビ忠正公忠勤ノ遺意ヲ感
 戴シ且ツ時勢ノ變遷ト制度ノ改革トヲ推考シ公義ヲ

取リ私情ヲ舎テ予カ心事ヲ洞察シ今春告諭スル所ノ
 如ク各其職ヲ勉メ前途ノ目的ヲ定メ祖先以來 朝廷
 ノ爲ノ盡ス所ヲシテ能ク始アリ又終アラシメバ汝等
 祖先亦眉ヲ地下ニ開カン然レバ則予カ幸ノミナラズ
 祖先諸公在天ノ靈モ亦其誠意ヲ鑒賞セラレン
 ○頃日坊間ニテ茶番狂言ノ太閤記十段目 鬪案ヲ見タ
 リ一官人陣羽織ヲ著シ軍扇ヲ持チ床几ニ倚リ群卒ニ
 令シテ曰山崎合戦ノ後明智道逃セリ汝等社寺士民ノ
 差別ヲク明智ノ在ル所ヲ探報セヨト群卒拜伏シテ唯
 ヲス官人入リテ後群卒方サニ起ツ其裝羽織袴ニテ短

刀ヲ帶フ宛モ近日府縣小吏ノ如シ四方ニ分散シ人ゴ
 トニ問テ曰ク汝家ニ明智ナキヤト一人更ヲ捐シテ曰
 官明地ヲ求メテ何ヲカナス曰ク悉ク桑茶ヲ植シムト
 觀衆絶倒セザルハナシ
 ○今般田中冬藏青木精一村上要信ノ三人 官許ヲ待
 テ米國ヨリ教師ヲ招キ音讀ハ洋人ニ託シ會讀ハ三人
 之ヲ司リ凌宕下ニテ日新義塾ト號ケシ語學義舎ヲ開
 キ塾中ノ費用モ頗ル少分ナリト云
 外國新聞節譯
 去年佛戰爭中佛兵ノ手ヘ分捕タル佛ノ小銃彈藥六

砲及其他ノ軍器數多東洋ノ國ニ買入レントス既ニシ
ヤマポー銃及ビ其他ノ元込銃八萬挺程 日本政府へ
讓渡ノ義ヲ約セシ由當時ベルリン府ニテモ「シヤスポ
ー銃五十六萬挺餘アリ是皆戰爭中ニ分捕セシ物ニテ
其内廿萬挺ハ「スタラスホルグ」及ビ「メッツ」兩所ノ武庫中
ニテ得シ者ニテ盡ク新製ノ銃ナリ右ノ外千八百六十
六年「奧斯多里」及ビ「獨逸」南部聯邦ヨリ分捕リ又「ステイ
ドハ」ノ「ウエルド」レステン及ビ「ブラグ」各所ノ武庫ニテ
分捕セシ小銃合セテ十二萬挺アリ「ベルリン」ニ於テハ
右分捕ノ品々ヲ貯藏スルニ地ナク五千門ノ「佛蘭西野

戰砲及ビ「ミテレイル」砲ヲ其府外ノ訓練場へ移セ
リ又千八百六十四年中「デンマルク」ノ戰爭間「ダ子ウ」ル
「ジユッペル」及ビ「アルセン」各所ニテ分捕セシ大砲輕砲合
シテ七十門餘アリト云此戰爭中宇ノ方ニテハ一門ノ
砲ヲモ敵ニ奪ハレザリシトソ實ニ可驚コトナリ○此
度「日耳曼」ニテハ一法令ヲ立「日耳曼」列國ノ總軍ハ砲兵
歩兵ハ新式ヲ一定セリ然レバ右分捕ノ軍器ハ總テ無
用ノ物トナルベシ尤「シヤスポー」銃ヲ「ウエルトル」形新式
ノ銃打銃ニ變製スルニハ其費用此少ニテ出来セル由
○字佛戰爭中宇ノ士官死傷ノ大畧戰死歩兵士官千五

十九人騎兵士官七十六人ナリ戦間士官ノ病死五百人
了リトツ

任議長

工部大輔後藤元燁

任工部大輔

租税頭 伊藤博文

任少議官

出石縣知事 從五位 仙石政固

任租税權頭

大藏大丞 上野景範

任德島縣大參事

井上高格

任津縣大參事

藤堂高克

任和歌山縣大參事

從五位 津田正臣

任福岡縣大參事

岩國縣權大參事 塩谷 處

任盛岡縣大參事

岡田種井

任長崎縣大參事

森岡清元衛門

○弘前縣青森エ移サレ青森縣ト改稱セラレタリ

○今般東京ヨリ長崎マデ傳信機ヲ設ケラル線路如左

東京、品川、横濱、程ヶ谷、戸塚、藤澤、大磯、小田原、箱根、沼津、原
吉原、蒲原、由井、奥津、江尻、静岡、鞠子、岡部、藤枝、鳴田、金谷、日
坂、掛川、袋井、見附、濱松、舞坂、荒井、白管、二川、豊橋、御油、赤阪、
藤川、岡崎、池鯉鮒、鳴海、熱田、名古屋、清須、一宮、岐阜、河渡、美
得寺、赤坂、岳井、関ヶ原、今須、柏原、醒井、番場、鳥居本、彦根、西京、
大坂、神戸、姫路、藤井、尾道、廣嶋、山口、赤間、福岡、佐賀、長崎、

○岸和田縣水嶋善一郎發明ニテ^カ根油ヲ新製セリ從
 來ノ種油ニ比較スルニ^ヒ根油七合ニテ種油一升ニ敵
 當シ火勢一陪盛ニシテ其價亦頗ル^廉ナル由山野^子根
 ニ富メル地其製場ヲ盛ニセバ利用更ニ大ナラン
 ○當秋ノ農作諸國一般ニ豐饒ナリシ由就中此頃九州
 ノ報聞ヲ得タルニ^西肥ハ十二分ノ豐作ナリ^斐筑八十
 分ニテ豐前上ニ同シ豐後之ニ次ク薩日隅何レモ宜シ
 尤^モ日隅ハ薩ニ稍勝レリトゾ

新聞雜誌第十六號終

報告

橫濱ヨリ海外諸港へ來往セル佛朗西^フ飛脚船^{フナ}航資^{カネ}此
 度^キ廢價ニ相改ルノ表

橫濱ヨリ	第一等	第二等	第三等	第四等
マルセイユ迄	四百四十元	三百三十元	百九十九元	百三十三元
ポールサイド迄	四百十二元	三百十元	百八十五元	百二十四元
イスマイリア迄	四百三元	三百二元	百八十二元	百二十一元
シコエー迄	三百九十四元	二百九十六元	百七十七元	百十九元
アデン迄	二百六十三元	百九十七元	百十九元	七十九元
カルキニツタ迄	三百十一元	二百三十四元	百四十四元	九十四元
マドラス迄	二百七十四元	二百六元	百二十三元	八十三元
ホシチセリイ迄	二百七十四元	二百六元	百二十三元	八十三元
ポアントポカル迄	二百四十六元	百八十五元	百十元	七十四元
接答粉 ^カ 迄	二百九十七元	二百三十三元	百三十四元	七十九元
聖嘉波 ^カ 迄	二百三十六元	百七十七元	百七元	七十二元
サイゴン迄	百九十元	百四十三元	八十五元	五十八元
香港 ^カ 迄	百十九元	八十九元	五十四元	三十六元

第一等航賃ヲ出ス旅客ハ船艙ニ在ル部屋并ニバツトリ
甲板下ノ上ニ於テ兩卧床附ノ室孰レニテモ望ミニ任
セテ之ヲ擇バシム

右第一等中ニハ食物并葡萄酒等ヲ入レ置ケリ
一個臥床或ハ兩個臥床附ノ室別段ニ好ノ旅客ハ第一
等航賃ノ外右航賃総高ノ半價譬バ四百元ノ航賃ナレ
バ其半二百元ヲ別ニ拂ヒ出スヘシ
航資表ノ外別ニ出帆着帆ノ日期表アリ之ヲ略ス

一千八百七十一年第九月六日 日本七月二十二日

横濱ニテ 佛國飛脚船會社名代アコニール

撰者伏テ四方ノ君子ニ告ル事同
其旨意前ニ述レテ知ル所事是則目録ノ如ク同人
何事ニヨリテ其意ヲ新聞ニ書スル事及下ノ如ク
ハ次第ニ刊行被ル事ニ由リテ其旨意ニ寄テ
可シ無名ノ書ハ概シテ未クハ無報ノ浮言造説ヲ
一切賣買 弘善堂ニヨリテ出版スル事件

一 由地山林家屋舟車等賣買借借
一 産物器具及名藥劑等一切賣買
一 諸般入奏出帆積荷物件等
一 店ニテ新現賣出等ノ引取
一 古等河ニ一行日三宇一度出帆積三奴宛同事件
三月分、廿四日分、廿六日分、廿八日分、引受

新編海志定稿

一 號定價銀二匁 當今三月三號定稿

二 三月分引受使向定價引 割半引

三 一ノ年分三割引

右定稿約定前金受取候上、番跡發見順序ヲ違ハズ、
引台至御相替可申候
又遠方取次費必ク重シ、
念本局引台至御相替可申候

東京下川の今川小舟

高 新 港

南西國橋上町三丁目

夏以新 和泉屋在在